

牧草地の裸地対策

ひと口に裸地と言っても、その原因も様々で対策方法は多岐に渡ります。今回は、裸地率（裸地になっている割合）の違いによって変わる対策方法について紹介させていただきます。

はじめに、対策方法として考えなければならない事は、“草地全体に播き直しが必要な場合”と“部分的な播き直しで済む場合”と、その対応は両者で大きく変わるということです。

草地全体の播き直しが必要な場合は、当年の飼料確保が課題になりますので、速やかな判断が求められます。当年の飼料確保のため、ムギ類（エンバク）や地域によってはデントコーンの播種も検討される事もありますが、草地にもどす場合は、機械が入れる春の早い時期に播種する必要があります。牧草の春播きは、雑草との競合^{かんばつ}や早魃の影響が心配されますので、チモシーの中でも初期生育の優れる早生品種（ホライズン）を選択される事をお奨めします。

一方、部分的な播き直しで済む場合は、追播作業となります。既存牧草を生かしつつ追播牧草を定着させていかなければならないので、裸地の割合も考慮しながら播種時期も含め対策方法を決めていきます。

草地の裸地率が4～5割程度の場合は、当年の収穫量が減収してしまいますが、2番草収穫後（8月下旬）の既存牧草が再生してくる前に追播すると、追播牧草の定着率も高く改善効果が認められます。また、裸地率が3割程度の場合、チモシーの追播はたいへん難しくなりますので、追播草種の検討をお奨めします。その場合、発芽初期生育が早く、糖含量の高いフェストロリウム（バーフェスト）や、ペレニアルライグラス（フレンド）、またオーチャードグラス（バッカス）などを混播して利用すると良いでしょう。

以下に具体的な対策事例を紹介します。



写真① 冬枯れにより裸地率8割の草地



写真② 播種ムラにより裸地率6割の草地

※ 裸地率が6割以上になってしまった場合は、草地全体の播き直しが必要です。

対策事例1（写真①の場合）

播種前にデスクハローやロータリーハローを利用して、土を露出させてから播種・鎮圧作業を行います。覆土が確実にできれば、発芽や初期生育も良く、草地も綺麗に仕上がります。

対策事例2（写真②の場合）

完全更新後や火山灰土壌など表層が柔らかい場合は、ブリリオン（写真③）やプロカスで播種し、その後鎮圧します。この時に牧草種子がしっかりと覆土出来ている事がポイントになります。覆土されていないと、発芽不良や生育不良の原因となり、早魃の影響も受けやすくなります。鎮圧のみで覆土が出来ない場合は、播種前にデスクハローのデスクの角度をつけずに（オフセットアドレスを0にして）利用し、少量の土を露出させてから播種・鎮圧作業を行と、覆土を確実にできるので、発芽や初期生育も良く草地は綺麗に仕上がります。



写真③ 牧草播種機ブリリオン

対策事例3 裸地率が5割以下の場合は2番草収穫後、既存草の再生前に追播しましょう！



写真④ 2番草収穫後、裸地率5割の草地



写真⑤ ハーバーマットによる追播



写真⑥ 追播後一ヵ月目の状況

追播のポイント

1. 播種時期：早春および8月下旬以降の土壌水分が豊富な時期が最適です。
2. 掃除刈り：収穫直後であれば必要ないですが、既存草が伸びていれば追播前に短く刈り取る必要があります。
3. 播種量：20～25kg/ha
4. 利用草種および混播播種量の例
オーチャードグラス（バッカス）10～15kg/ha、フェストロリウム（バーフェスト）5～7kg/ha、アルファルファ（ケレス）3～5kg/ha、シロクローバ（ルナメイ）1～3kg/ha
5. 播種作業：デスクハローで土を露出後、播種・鎮圧する。または、専用播種機（ハーバーマット・シードマチック etc.）を利用する。
6. 専用播種機を利用する場合、作業スピードは5km/h程度とし、鎮圧作業は行いません。

追播時の施肥は避ける

追播時の施肥は中止し、追播後一ヵ月程度してから発芽した牧草の生育が緩慢な場合は、硫酸を10アール当たり10kg程度散布して下さい。

専用播種機を利用した播種後の堆肥散布は追播牧草の生育の妨げとなり、裸地の原因になりますので止めましょう。しかし、尿やスラリーなど液状のものであれば、その限りではありません。

尿やスラリーを散布する場合は、播種後一ヵ月以上経過した後で、散布量は10アール当たり1～2t程度とします。散布作業は、草地が乾いている時に行ってください。雨上がりや散布した直後に再度侵入すると、タイヤの跡が枯死する恐れがありますので注意が必要です。

